松尾大社三神像の制作背景についての一考察

飯村 建成 (早稲田大学)

京都松尾大社には、老年相及び壮年相の男神像と、女神像で構成される三軀の神像が伝来する。本像は、現存する神像彫刻の中でも九世紀に遡る最古級の作例として著名であるものの、同時期における位置付けは明確になっていない。また、『長秋記』長承元年(1132)六月三日条では、円珍造立という「神宮寺御座御正体」の記載により、三神像が松尾神宮寺に所在していたことが知られる。

本発表では、三神像の制作時期から各像の名称に至り、三軀の制作背景について論じる。具体的には、諸作例との比較を行い三軀の制作年代を特定し、神名を比定し、本像がどのような神を表現したものか考察する。なおかつ九世紀の松尾社の状況を確認し、本像の制作意義に及ぶ。

三神像の神名については諸説あるものの、概ね二種に大別される。一説は老年相の像と女神像をそれぞれ大山咋神と市杵島姫命に当てる説で、壮年相の像についてはさらに諸説分かれる。いま一説は伊東史朗氏が近年発表した説で、「秦氏本系帳」(九世紀頃成立か)にみえる「三所大明神」という神に注目するものである。「三所大明神」は同史料によれば「松尾大明神」、「賀茂別雷命」、「玉依日売」となり、伊東氏はそれぞれ老年相、壮年相、女神の各像に比定した。本発表では、神名を特定するべく、「秦氏本系帳」の記載の考察から、伊東氏の説を中心に諸説を検討する。さらに、表現の上から三神像の位置づけにも注目したい。二軀の男神像において表現上老若の差をつけ、二像を対比させるような造形がみられることからすれば、二像は親神と御子神という関係にあると推定できる。女神像を含めて、三神像は、二軀の親神と一軀の御子神像の三柱として成立したといえるのではなかろうか。

神名の検討によって、三神像は秦氏が奉祀してきた神を表現したものと結論づけられる。九世紀に松尾社の神階が相次いで昇叙されたことから、朝廷の尊崇が篤かったことを三神像の制作に結びつけて考える見解も従来はあった。ただし、松尾社の祭祀については不明な点が多く、その上で、朝廷が担う祭祀は部分的であったという指摘がある。本発表では、こうした見解を受け、松尾社を奉祀してきた秦氏の氏神祭祀の一環として三神像が制作されたと考えたい。また、こうした観点から三神像を捉えれば、三軀の坐法や女神像の頸に刻まれる三道のような皺が、仏教的要素とみなされてきたことにも符号する。古くから仏教信仰に篤い秦氏による神仏習合思想を示すものとしてこの造形に言及し、同じく仏教的な造形要素をあらわす神像彫刻に三神像が与えた影響についても論じる。

秦氏の祖神像としての性格をあらためて強調し、氏族の信仰の中で制作された神像彫刻作例として三神像を位置付け、未だ解明されていない神仏習合像制作の背景について試論を提示したい。